

開催地名：富山県魚津市	
開催日時	令和2年2月22日（土） 10:30～11:45
開催場所	新川文化ホール
語り部	大内 幸子（宮城県仙台市）
参加者	魚津市自主防災組織、魚津市防災士会、市職員 約80名
開催経緯	<p>当市では、地震、津波被害のほか、洪水、土砂災害等さまざまな自然災害が想定されるため、それぞれの地域の特色にあった防災対策を行わなければならない。幸いにも多くの人身被害を伴う災害が発生していないが、それ故自主防災組織、市職員においても、防災に対する意識が低く、実災害が発生した場合に、避難所運営等の災害対策を行えるかが課題となっている。また、「自助」、「共助」の向上が求められており、実際に災害を体験した方からの講演により、少しでも防災意識の醸成を進めていければと考えている。</p>
内容	<p>（1）東日本大震災当日</p> <p>2011年3月11日2時46分に地震が発生した。震度6強だったが、防災訓練で震度7の起震車に乗ったときよりも激しい揺れに感じた。私たちは、このまま、おそらく日本全体が沈没してしまうのではないかと思いながら、この5分間を耐えていた。日頃から訓練をしていた私たちは、まず要支援者の安否確認に走り、それから被害状況の確認、避難誘導を実施した。私は高砂小学校という指定避難所に駆けつけ、暗くなる前に、炊き出しの準備や災害対策本部の立ち上げを行った。</p> <p>仙台駅の構内も地震による被害が発生し、電車を利用し、帰宅しようとした人々が全部締め出されていた。そのため、仙台駅の近くの小学校等は、その帰宅困難者であふれてしまい、地域の人たちが避難することになっている避難所から、地域の人たちが押し出されてしまった。</p> <p>（2）震災で感じたこと</p> <p>お年寄りや障害者の要支援者リストを作り、市内外の住民組織と協力協定を結んできた、地域の防災モデルである「福住町方式」が、東日本大震災時に役立つと言える。しかし、お年寄りや障害者の要支援者リストについては、課題や気付いた点もあった。まず、家屋が崩壊し、立ち入れなかったため、要支援者の名簿やマニュアルを取り出せなかった。名簿が頭に入っていたので、幸いにして安否確認はできた。</p> <p>また、指定避難所は人が殺到して、立ち上げが遅れた。避難所となった高砂小学校には500名分の準備しかなかったが、そこへ1,500～1,600名が避難し、市役所にも、帰宅困難者である2,000名以上の避難者が殺到した。</p>

さらに、ライフラインは止まり、電話・メールなどの通信も途絶えた。災害時に水が出る公園を知っていたので水を汲みに行き、炊き出しを行った、中でも、最も困ったのがトイレである。小学校のプールにトイレ用の水を汲みに行ったが、トイレの数が絶対的に足りなかったため、公園に手掘りのトイレも作った。震災の関連死にはトイレに関したものが多い。外のトイレは寒く、室内のトイレは機能していないため、我慢して水分を摂らない人がいる。そうすると体調を崩してしまう。そのため、断水になることを想定したトイレ用の水の確保や数の確保については、最低限のトイレ対策として事前に考慮しておくべきである。

一方、他市町村と進めてきた災害時相互協力協定については、非常に重要なものであると強く認識できた。3日分備蓄していた食料が大体底をついてきて、足りなくなってしまうだろうというときに、この協定を結んでいた山形県尾花沢市や新潟県小千谷市等、いろいろなところから直接福住町にトラックで支援物資が続々と届き、大変助かった。

(3) 教訓として

日常の取組と訓練が災害時に力を発揮するということを強く思った。要支援者の名簿作成を行っていたことや、全員参加型の防災訓練を行っていたこと、そして、災害時相互協力協定を結んでいたことが大いに役に立った。

また、災害時には女性の視点にたった配慮が必要だと強く感じた。自主防災組織などは、男性が中心であるが、災害弱者といわれる方への気配りや支援は、やはり女性の方が長けているため、避難所運営は女性の方がスムーズに行えると言える。阪神淡路大震災のときにも言われていたことであるが、避難してくる住民の8割が、いわゆる災害弱者と言われる高齢者、障害者、妊婦、子どもたちという事実から、男性だけで運営するよりも女性のリーダーがいることで、より細かいところまで行き届いた対応が可能となる。



開催地より

災害に対して十分な準備をし、そして実際に災害に遭遇して適切に対応をされた語り部のお話は、非常にわかりやすく、そして我々にとって有益な内容だった。今後の防災活動に役立てていきたいと思う。